

リ
セ
ツ
ト
9

コット ▶

狼の耳と尻尾を持つ
獣人。攫われた仲間
を助けるため、フォー
ン大陸にやってきた。



▲ ユアン

ルーナの次兄。
魔法の才能があり、
魔法師団に所属している。

▲ 焰王
ディグルレーメ



ルーナの守護者たち

▲ 水姫



▲ 風姫



シリウス▶



レグルス▲



▲ リュシオン(21歳)

クレセニアの王太子。
強大な魔力を持つ
魔法使い。

▲ フレイル(18歳)

魔法師団に所属してい
る、精霊使いの少年。
他人にはその力を秘密
にしている。

▲ カイン(20歳)

ルーナに助けられ、
公爵家に身を寄せていた、
エアデルト国の第二王子。
現在はクレセニアに
留学中。

▲ ルーナ(14歳)

千幸が転生した姿。
リヒトルーチェ公爵令嬢。
前世の記憶と強大な魔力を
持ちつつ人生やり直し中。

千幸(享年18歳)▲
超不幸体質の女子高生。

第一章 去る者と行く者

偽りを知る時、あなたは崩れることなく、立つことができますか？

海辺特有の強い風が、潮の香りを運んで通り過ぎる。

ここは港町カール。

クレセニア王国においては、北東の端に位置する港町だ。

とはいえ、他国の船が寄港するような立派なものではなく、漁船が集うだけの小さな港である。

その入り江の外れに、ここでは珍しい小型の帆船が停泊していた。出航準備のためか、甲板の上では船員たちが忙しなく行き交っている。

帆船を臨む栈橋には、十代半ばと思われる一人の少女。彼女は、忙しそうに動く乗組員たちの様子を、ただぼんやりと眺めていた。

その少女——ルーナは、海風にたなびく銀髪を押さえながら、視線を紺碧の海へ移す。

太陽の光を弾く白い肌に、うっすらとピンクを帯びる頬。通った鼻筋に形の良い唇。絶世と称し

ても良いほどの美貌は、寶石のような緑の瞳によってさらに輝きを増していた。青空と白い雲、紺碧の海という絶景の中で、彼女の美しさは霞むどころか、相乗効果をもたらしている。

けれどルーナ自身は、それに気づくこともなく、ただ煌めく海面に目を奪われていた。

「あっちゅう間だな」

不意に後方から声がかけられる。

「そうだね」

驚くことなく、ルーナは振り向きざまにうなずいた。

ゆっくりと近づいてきたのは、フードを深く被った長身の青年——コットだ。

人でありながら獣の相を持つ獣人。それが彼だ。だが今は、その特徴である獣耳や尻尾をフードに隠しているため、獣人だと気付かれることはない。

ただ、外套越しでもわかる長身と、鍛えられた身体つきのせいで、自然と周囲の目を集めている。

「嬢ちゃん……色々ありがとな」

浅黒い顔から笑みを消し、コットは真摯な表情で告げた。

ルーナはそんな彼に対し、ふるふると首を横に振る。

「お礼を言われることなんてないですよ。実際、コットさんたちに色々手を尽くしたのは、わたしじゃなくて、リユーや父様たちだし」

「ああ、もちろん彼らにも感謝しとる。ばってん、嬢ちゃんがおれたちにくれたことも、十分

助かったけん、素直に感謝の気持ちは受け取ってほしか」

そう告げるコットの気持ちを読み、ルーナはコクンとうなずいた。

二人の間に和やかな空気が流れたところで、それを破る大声が周囲に響く。

「ルーナ！」

「コット！」

嬉しそうな声と同時に、ルーナとコットそれぞれにドンツと軽い衝撃が襲った。

同時に振り返った二人は、腰のあたりに抱きつく子供たちに向かって破顔する。

「二人とも起きたの？」

ルーナが尋ねると、子供たちのうち、より幼い方——カイが答えた。

「うん！ 馬車が停まっていたから出てきたの。そしたら海が見えてびっくりした！」

目の前の光景に興奮を隠せないとばかりに、カイが捲し立てる。

それに続き、もう一人の少年——シウが尋ねた。

「ねえコット、着いたの？」

わくわくといった様子を隠さない二人に、コットは苦笑しつつ答える。

「そうだ、到着したと。おまえたちはぐっすり寝よつとったからな。そんなま起こさないでおいとよ」

「今、出航の準備をしているのよ」

ルーナが帆船を指さして言うと、それを目で追った少年たちは歓声をあげた。

「すごい！ あんな大きな船に乗るの？」

「コット、早く乗りたい！」

待ちきれないとばかりに、ぴよんぴよんとその場で跳ねる子供たち。

「まだ準備中だって言ったやる。もちっと待て」

「えー」

「そんなあ」

コットの言葉に、カイとシウは不満そうに頬を膨らませた。

宥めようと二人の頭を撫でながら、コットは内心複雑な思いを抱く。

シウとカイがこのフォン大陸に連れてこられた時も、同様の船に乗ってきたはずだった。しかし、誘拐され、船底の倉庫に押し込まれていたため、彼らは自分たちがどんな風に大陸に来たか知らないのだ。

(いやな記憶があるよりはましか……)

あえて指摘する必要はないと判断し、コットは無言でシウたちの頭を撫で続ける。

ルーナもまた、コットの心の内を慮り、ただ笑みだけを浮かべたのだった。

「あつ、ルーナ様、コットさん、ここにいたんですね！」

棧橋の上から出航準備中の船を眺めたり、魚の影を探したりしている四人に、元気の良い少女の声が届く。

そちらを見れば、声の主と思われる少女が大きく手を振っていた。さらにその後ろに、数人が続いている。

全員の性別や年齢はバラバラだが、皆一様にフードのついた外套に身を包んでいた。

声をかけてきた少女は、その中でも一番小柄な身体つきをしている。年齢は、シウやカイよりほんの少し年上といったところだろう。

「皆来たんだね」

全員が近づくと、ルーナは笑顔を向けて言った。

「はい。馬車の中で目を覚ましたら潮の香りがしたので、びっくりしました」

「俺も窓の外を見た瞬間、我が目を疑ったぞ」

「本当に！」

その時の驚きを表現しつつ、皆がうなずき合う。

ルーナは、浮ついた皆の様子に、クスリと笑って口を開いた。

「皆、結構疲れていたみたいだから、起こさないでいたの。それにね、出航にはまだ時間があったから」

「そういうことだ。まあ、皆が起きなかったんは、ルーナのかけてくれた眠りの魔法っちゅうせいもあると。ここへきて、精神的な疲れなんかも一気に来よるんちゃうか」

コットが続けると、全員がなるほどばかりにうなずく。

彼らが顔以外を隠すのは、自分たちの種族——獣人だということを知られないためだ。彼らの獣

相には犬耳や猫耳以外にも、背中に翼を持つ者や、肌うぶに鱗うろこが広がっているなどというものがある。それらを隠すために、全員が外套がいとうに身を包んでいるのだ。

ひと月ほど前、彼らは自分たちが暮らす島から、攫さらわれてフォーン大陸に來た。けれど、助けようと後を追ってきたコットと、彼らの境遇を偶然知ったルーナたちによって救われ、ようやく自分たちの故郷へ帰る目処めどがついたのだ。

本来ならば、王都からこのカラルまでの道のりは、軽く見積もっても二週間かかる。

だが、王太子をはじめ、ルーナの父であるリヒトルーチェ公爵らの計らいによって、貴族ですら滅多に利用できない〈転移門〉の使用を許可されたため、数日で到着できた。

それは、故郷より海を隔てたクレセニアに無理矢理連れて來られ、酷い目にあつた彼らに対する償つぐないの意味もあつた。

彼らを攫つたのは、末端とはいえクレセニアの貴族。

国王や上層部は、その責任の一端をしつかりと胸に刻んでいたのだ。

とはいえ、〈転移門〉の設置してある場所は決まっているため、カラルまで一気に移動できるわけではない。それでも、転送先の〈転移門〉からは、馬車を使えば二日ほどで到着する。

馬車には御者ぎよしやも手配されていたため、全員がゆつくりと馬車で寛くわんぐことができた。

だが、攫さらわれた面々の中には、売られるという過酷な経験をした者もいる。そういった者たちは、未だ精神的に不安定な状態だつた。

そのため、ルーナは皆に許可を得て〈睡眠〉の魔法を施ほどこしたのだ。

〈睡眠〉の魔法は、相手を眠りに導くもの。

そのおかげで、早朝に発たつた馬車の中、数時間後カラルに到着するまで、全員がしっかりと熟じゆく睡すいすることができたのだつた。

(よかつた……思つたより元氣そう……)

ルーナは集まつた皆の顔を順々に見て、安堵した。

睡眠によつて精神も肉体も安らぎを得たようで、それが彼らの表情に表れている。

「あと少しで故郷に帰れるのね……」

ぼつりと小さくつぶやかれた声に、ルーナはハツとした。

己の心情を吐露とろした女性は、兎の獸相を持つ二十歳くらいの獸人だ。

フードからは長く垂れた白い耳がわずかに見える。髪も雪のような白で、瞳は血の色にも似た真紅まにだ。

彼女は不幸にも、可愛らしい容姿に目をつけられ、早い段階で売られてしまった。

助けられたものの、心に負つた傷は大きく、同じ獸人たちにさえ怯おそえていた。

ずっと強張ひばつたままの表情が少しだけ緩ゆるんでいるのを見て、ルーナは目頭が熱くなるのを感じた。

そんな時、つんつんと袖口を引かれ、ルーナは視線を下げる。

「ねえルーナ、もうお船に乗れる？」

カイに尋ねられ、彼女は確かめるように視線を船へと向けた。

「そうね、そろそろ準備も終わりかしら」

先ほどまで忙しそうに動き回っていた船員たちだが、今はそれぞれの持ち場についているようだった。

「ちよつと聞いてみるね」

ルーナはカイに言うど、棧橋さんぼしから船へと向かおうとする。

しかし次の瞬間、船から降りてくる人物を認めて足を止めた。

「フレイル！」

ルーナの声が聞こえたのか、現れた人物——フレイルが彼女へ顔を向ける。

彼は、わかつているとばかりにうなずくと、落ち着いた足取りで棧橋を歩いてきた。

「皆、揃っているみたいだな」

ルーナたちのもとに辿り着いたフレイルは、ぐるりと周囲を見回して言う。そんな彼に、ルーナは勢い込んで尋ねた。

「フレイル、出発の準備はどう？」

「先ほど終わったようだ。そちらはどうだ？」

フレイルの言葉に、コットは仲間へ視線を向けて様子を窺うかがう。

皆、それぞれ小さな荷物を手にしており、すぐにでも乗船できる状態だ。不安そうにしている者はおらず、むしろ早く乗船したいと言った様子を醸なまし出している。

「よかよ」

コットがつぶやくと、フレイルは彼らに向き合った。

「旅に出る前にも説明した通り、ここから船に乗り、一度別の大きな港に向かう。そこで食料等の補充をした後、君たちの故郷へと順に送っていくことになる」

一度説明がなされているせいか、特に戸惑う様子もなく皆がうなずく。それを確認した後、フレイルはさらに続けた。

「大きな船ではないので、不便な面もあると思う。それについては申し訳ないが我慢してほしい。だが、できることなら対処するので、遠慮なく言ってくれ」

真剣に説明を聞く者たち。彼らの様子に、今のところ不満の色は見えない。

皆、多少の不便は覚悟の上だ。むしろ不満があれば申し出て良いと告げられることこそ、破格の扱いだとわかつていた。

「大丈夫だ。その辺は理解しとる」

全員を代表してコットが言うど、フレイルは軽く手を上げて応こたえる。

そんなやり取りを終えたところで、船からもう一人背の高い男が降りてきた。遠くからでもわかる長身と、それに見合った立派な体格の中年の男だ。

後ろに流した長めの黒髪に、口元と顎あごにたくわえられた豊かな髭ひげ。彫りが深いせいで、太い眉の下にある目には影がかかっている。

服装は胸元が大きく開いた開襟かみえシャツに、シンプルな黒いズボンとロングブーツという出で立ちだ。

いかにも海の男といった風情だが、どこか威厳がある。

「フレイルさんよ、こつちの準備は整ったぜ」

体格に合った低く太い声で、男はフレイルに告げた。

「わかった。ああ、ちょうどいい」

フレイルは男に応えた後、自分たちに注目する獣人たちへ目を向ける。

新たに現れた男に、わずかな怯えや警戒を見せる者たち。そんな彼らを安心させるように笑って、フレイルが口を開いた。

「彼はシュバルツ。君たちがこれから乗る船の船長だ」

「おう。よろしくな」

気安い挨拶をする男——シュバルツに、その場がざわつく。

故郷まで帰るには、どうしても他人の手を借りなければならぬ。それは仕方がないことだ。

けれど、自分たちを救ってくれ、コットの信用もあるルーナやフレイルはともかく、初対面の男に簡単に心など開けないというのが正直なところだった。

彼らの心情を理解してか、シュバルツは改めて言葉を尽くす。

「おまえたちの事情は聞いている。いきなり信用することはできないだろうが、俺の誇りにかけ、おまえたちを必ず故郷へ送り返すと誓う。安心してほしい」

シュバルツの力強い宣言に、心に響くものがあったのだろう。獣人たちはゆっくりとうなずいた。

「よしっ、じゃあ早速乗船だ！」

その言葉に一番に反応したのは、シウとカイだ。

「わあ、お船に乗れるっ！」

「皆、早く乗ろうぜ！」

無邪気に喜ぶカイと、興奮気味のシウ。

子供らしい二人の様子に、他の者たちも思わず和んだ。

「皆、船長の言うことを聞いて、乗船は始めてくれ」

コットが告げると、シウとカイを先頭に、皆が船の方へと棧橋を進んでいく。

そんな中、コットは彼らの姿を見送っていたルーナとフレイルに向き直った。

「あんたらとは、ここでお別れやな」

しんみりと告げたコットに、フレイルはふっと表情を緩める。

「ああ。故郷に帰れるんだ、もっと喜んでいいんだぞ」

「もちろん喜んで。やけどまあ、別れは苦手でな」

コットは頭を掻くと、真面目な顔になってルーナを見た。

「ルーナ」

「……なあに？」

あまりにも真剣な眼差しを向けられ、ルーナは戸惑いながらも応える。しかしコットは、表情を緩めることなく口を開いた。

「先日の話、覚えてとうと？」

「うん、あの話だよね」

軽々しく口でできる内容ではないことから、二人とも具体的な単語を出さずに話す。だが、それが何を指すか、お互いきちんとわかっていた。

ルーナは「あの話」をした時のことを思い返す――

十

時は数日前に遡る。

ルーナは、リュシオンやカイン、そしてジーンの四人で、密かにコットたちの隠れ家を訪れていた。

民家にしては広く作られた居間には、コの字型で三脚のソファが置かれている。その片方にリュシオンとジーンが、向かい側にカインとルーナがそれぞれ腰を下ろしていた。

獣人たちのリーダーとなっているコットは、ルーナたちの訪問が急だったせいで、時機悪く出かけてしまっている。

彼が帰ってくるまでの間、四人の話題は、おのずと一連の事件についてになっていた。

王宮の女官が魔物化した事件から、三日が経っている。

しかし、王妃の毒殺だけでなく、女官の魔物化にも関与していると思われた男――グレイヴル伯爵家に仕えていたロバートの行方は杳として知れなかった。

「こうまで見事に雲隠れされるとはな」

長い脚を組み替え、リュシオンは苛立たしげな様子でつぶやく。

「悔しいですが、予想通りとも言えます」

カインは苛立ちを苦笑で隠しつつ、リュシオンに応えた。

話しているのは、ロバートという件の従僕のこと。

『レミアールの調べ』という美容薬に毒物を混入し、直接王妃を殺害したのは彼女の女官だった。

しかし、それを計画し、実行させたのはロバートという男だ。しかもその女官が魔物化したことで、ある疑惑が深まる。

ルーナたちが見てきた、人間が魔物化するという現象。そこには、必ずと言っていいほど魔族の影がちらついていたので。

となれば、今回の事件も魔族の関与があるのは確かだろう。さらに言えば、ロバートこそが魔族であると考えられた。

「やはり、ロバートというのは……」

「十中八九、魔族でしょうね」

ジーンの言葉に、カインが眉を蹙めて言う。

皆がうなづく中、今度はリュシオンが口を開いた。

「俺たちは少なくとも二人の魔族を見ている。こうなると、他にもまだ魔族が存在すると思った方がいいだろうな」

「そうですね。僕たちが知っているのはバルナドと呼ばれたあの男と、地下水路の広場に現れたも

う一人の魔族。ホレスの話では、ロバートという男と彼らに一致する特徴はありませんが……」

「相手は魔族だからな。容姿など簡単に変えられるだろう」

カインの言葉をとらえて、リュシオンはため息まじりに答える。

魔法が使えるならば、〈変化〉の魔法によつて姿を変えることは可能だ。

本来、〈変化〉の魔法が使えたとしても、四六時中人の目がある中で、常にその状態を維持し続けるのは難しい。膨大な魔力を持つリュシオンやルーナであつてもだ。

だが、魔族ならば、それも容易いことだと思われる。

ロバートが魔族であり、〈変化〉の魔法を使つて使用人に扮していたとしたら、やはり魔族は伝承の通り、優れた魔法使いなのだ。

（魔法に長けた種族……人と仲良くしてくれるのなら、心強いのに……でも）

ルーナは地下水路での出来事を思い出し、ぶるりと身体を震わせた。

無慈悲に人を傷つけ、それを楽しんでさえた魔族の姿。

あの残虐性が種族の特徴だとしたら、人と共存するのは厳しい。

「厄介ですな……」

物思いにふけつていたルーナは、カインのつぶやきで我に返る。そして、続くジーンの言葉に耳を傾けた。

「魔族に対して、私たちは想像以上に無力です。ですが、たとえロバートが魔族だとしても、クレセニア王国に牙を剥いた相手をそのままにはしておけないでしょう」

魔族だろうがなんだろうが、一国の王妃に毒を盛れば、その国に対して宣戦布告をしたのも同然。クレセニア王国としては、体面を保つ意味もあつて当然報復を考えねばならない。

しかし、その相手は人や国ではなく魔族だ。

人より魔法の扱いに長け、魔力量も膨大な種族に、どう立ち向かつていくというのか。

そもそも実際に彼らを目にしたルーナたちはともかく、ほとんどの人間は魔族という存在に恐怖を感じつつも、現実には存在しないものだと思つて認識している。

魔族が実在すると広まるだけでどんな混乱が起きるのか、まったくの未知数だった。

（前世の日本で、「実は、おとぎ話のドラゴンや、吸血鬼は存在します。でもって襲ってきますから」なんて言われたら、間違いなくパニックだよ。この世界——サンクトロイメでの魔族は、今やそれくらい存在なんでもね……）

ルーナは、状況を前世の世界にあてはめて思う。

「魔族の存在が一般市民に知られれば、少なからず混乱するだろうな」

リュシオンは改めて問題を口にする、不快そうに眉間に皺を寄せる。

（戦術のない民間人だったら、蹂躪されるがままになるのは目に見えてるもの。混乱するだけじゃなくて、自棄になる人も出てくるだろうし……）

さらに、前世で見たいくつかの映画を思い浮かべつつ、ルーナは小さくため息をついた。

実際にどうなるかはわからないが、そういった事態になることもあり得ると、今のうちに考えておくことは大事だ。

「それにしても、魔族の存在は確実で、その力が脅威となると……。しいて楽天的になれる点と言えば、魔族という種族が人類よりも圧倒的に少ないということだけでしょう」

ジーンの言葉に、リュシオンは軽くうなずいてみせる。

「確かにな。奴らの能力は俺たちを上回っているとしても、総数は勝っているはずだ。奴らが小細工するのも、自分たちの仲間が少ないからか……」

「でしようね」

皆が同意する横で、ルーナは考え込む。

（魔族がたくさんいるなら、とうの昔に人類は魔族に滅ぼされていてもおかしくないだよな。たぶん、リュウたちが言うように、魔族の絶対数は少ない。だからこそ、こうやって裏で暗躍しているわけで……あれっ？）

ルーナはハッと目を睨り、慌てて口を開いた。

「ねえ、ちょっと思っただけけど……王妃様の死について魔族が関わっていると、何を企んでこんなことをしたのかははっきりしていないよね。でも、それ以前のことについてはどう？ 彼らの目的は神域で、何かを探していた。もしかしたら、数ではどうしても劣ってしまう人と対峙するため——そのために必要な何かを得ようとしていたんじゃないのかな？」

「なるほど……そうだとしたら、魔族が大きな力を得る前に、なんとかしないとってことか」

難しい顔を崩さないまま、ジーンが答える。

魔族がさらなる力を得る前に、奴らを倒す。

言ってみれば単純明快な答えだが、それを実行するのは難しい。

地下水路での戦闘で否が応にも理解したこと——おそらく人間としては最高峰と言える魔力と才を持つリュシオンやルーナでさえ、バルナドに一方的に押されていた事実。

ならばと物理攻撃を仕掛けても、防御魔法で防がればなんの意味もない。

バルナドと対峙した時、魔法のみならず、剣での攻撃も仕掛けていた。けれどそれらの攻撃は、魔族を前にしてみれば兇戯に等しい。

ではどうすれば良いのか——

「やはり、あれについてコットに聞くべきだな」

リュシオンがそう言ったところで、バタンと唐突にドアが開いた。

全員が目が一斉にドアへと集まる中、軽く手を上げて入ってきたのは件の獣人の青年——コットだ。

「なんや？ えらく深刻そうな顔して」

きよんとした様子で尋ねるコットに、ルーナは苦笑しつつ口を開く。

「なんでもないよ。ところで用事はすんだの？ あっ、そういえば、ここでの生活に不自由はない？ 大丈夫？」

立て続けの質問に、今度はコットが苦笑する。

「心配しとってくれてありがとうな。それから待たせて悪かった。ちょこっと買い物に出ただけなんや」

「ああ、気にするな。突然訪ねてきたのは俺たちの方だ」

「そう言ってもらえると助かるばい」

代表して言ったリュシオンに、コットは軽く笑って頭を下げた。それにうなずいてから、リュシオンが尋ねる。

「それで、コット。ルーナの言う通り、不自由はないか？」

「問題ない。どころか、快適に過ごせとるくらいや」

「それはよかった」

コットの答えを聞くと、リュシオンは破顔した。

末端とはいえ、自国の貴族が彼ら獣人たちを苦難に陥れたのだ。リュシオンはクレセニアの王太子として、その責を感じていた。

コットもそれはわかっているのか、安心させるように微笑んでみせる。

彼は部屋の隅にあった背凭れのある椅子を手にとると、ルーナたちの近くに置いて乱暴に腰かけた。

「あの……皆さんはどうしてる？」

おずおずとルーナが訊く。

皆さんというのは、助けられて以来この家で暮らしている獣人たちだ。

今もこの家にいるはずだが、彼女たちの前には姿を現さないどころか、気配すら感じられなかった。

だが、それも仕方がないことなのかもしれない。

つい先日、売られていた数人の獣人たちも助け出された。しかし、助け出されるまでの時間を消すことはできない。

精神的にも肉体的にも多大な傷を負った者たちを思い浮かべ、ルーナは苦しげに眉を寄せた。

「元氣、とはいかんが、ここには仲間しかおらんこつ、落ち着いてきとるばい」

「そっか……」

売られる前に助けられた獣人たちも、劣悪な環境で怯えて過ごしていたのだ。助け出されたとはいえ、精神的な安寧は簡単には訪れない。

それでも、彼らが少しでも安らかに過ごしていることに、ルーナはわずかながらも気が休まった。

「あー、ところで話があっけんやる？」

コットは話題を変えるように、全員を見回して尋ねる。その視線を受け、コット以外が顔を見合わせた。

やがてうなずき合うと、リュシオンが代表して口を開く。

「回りくどく言って時間を浪費するのも馬鹿らしいから単刀直入に聞か、おまえが持っていた武器。あれがどういものなのか教えてほしい」

「あれか……」

コットはさほど驚いた様子もなくつぶやいた。そして大きなため息をつく。俯き、腕を組んで考え込む。

しばらくの間、誰も口を開かず、ただ沈黙だけが室内に満ちた。

だがやがて、コットは覚悟を決めたかのように顔を上げる。

「あんたらは、俺たちを助けてくれた。それに報いるつちゅうのが筋やる」

彼はそう前置きすると、改めて口を開いた。

「ありゃ、俺たちの一族で守ってきよった『神宝』や」

「神宝？」

コットの言葉を、ジーンが反芻する。

「そうだ。あれは遙か昔、先祖が神より託されたもんや。俺たちの一族は狼の血ば引いとる。群れの習性があるせいやろか、獣人の一族の中では最初に里を作ってまとまったんや。その最初の里長になったもんが、神から授かったちゅうんがその謂れだ」

「神様から……」

ルーナがポツリとつぶやく。

その言葉には、無意識に疑問の色が滲んでいたのだろう。それを感じとったコットは、ルーナに厳しい視線を向けた。

何気ないつぶやきだったが、自分たちの神話が否定されたように彼は感じたのだ。

思った以上に非難の目を向けられたルーナは、わたわたと両手を動かしながら言い訳する。

「ご、ごめん。でも、神々の時代って、三千年以上前とか言われているんだよね？ 本当に大昔の

話じゃない？」

ルーナは、改めてフォーン大陸に伝わる神話を思い出す。

大陸に伝わる神話では、五柱の神について語られていた。

死と転生を司り、冥界の主でもある男神シュト。

その妻であり、生命と豊穣を司る慈愛の女神セーレ。

彼らの息子神であり、叡智と勝利を司る太陽神ソレス。

ソレスの片割れでもある双子神、魔力と治癒を司る月の女神ルナリス。

末子の神は、すべての水を司る、旅人の守護神たる海神ダール。

フォーン大陸で多く語られる神話は、基本この五柱の神が中心となっている。

そんな神話の最後の章は、五柱の神を中心に、すべての神々がサントロイメから去り、眠りにつくというものだ。

その時、神々は一人の良き人間の王にこの世を託すことにした。それがかつてフォーン大陸に一大王国を築いた、ソルヴァーンという人物だ。

彼が長く治めた国は、現代では古代魔法王国として知られている。

そんな古代魔法王国が存在した時代が、約三千年前。先ほどルーナが口にしたのは、この事実があるからだ。

「確かに五大神はフォーン大陸で広く信仰されているが、コットたちも同じなのか？」
不意にリュシオンが問いかけると、ルーナは「あつ」と息を呑む。

五柱の神はフォーン大陸で信仰されている神——つまり、人族の神。

獣人たちの住む島々において神と称されるのが、同じ五大神だとは限らないのだ。

これまで獣人とあまり交流がなかったため、彼らの文化や風習をルーナたちは深く知らないでいた。

「五大神？」

きよとんとしてつぶやくコットに、皆はリュシオンの考えが正しいと知る。

「——じゃあ、とりあえず五大神について話すね」

そう言うと、ルーナは簡単にフォーン大陸の神々について語り始めた。そうして、神々が地上から去ったところまでを話すと、彼女は一息入れるように口を閉じる。

そんな彼女に代わり、今度はジーンが後を繋げた。

「神々が去った後、偉大なる庇護者が消えた不安や恐怖から、瘴気が世界に生み出された。さらに瘴気から魔物といったものが生まれるようになる。けれど、人には魔物に抗う術がなかった。それらの存在が、人をはじめとして獣や精霊たちですら滅ぼすと思われた時、神はついに救いの手を差し伸べてくれた。それが——魔法だ。人は神によつて戦う術をもたらされ、魔物たちに対抗できるようになった。魔法の力は魔物を退けるだけではなく、人の暮らしを豊かにしたということだね。最初の王ソルヴァーンは、魔法によつて一大王国を築き、千年の長きにわたって治める。けれど千年目、王国は一夜にして滅び、それによつて多くの魔法は失われたんだ。この古代魔法王国が滅びた理由は謎だが、魔族の襲撃という説もあるね」

ジーンが語り終えると、コットは眉間に皺を寄せ、口元に手をやった。

「コットさん？」

ルーナが声をかけると、コットは軽く手を上げた。

「そつちの神についてはわかった。今度は俺たちに伝わる話やな」

コットはそう言うと、獣人たちに伝わる神話を語り出した。

「俺たち獣人の民は、自然のあちこちに神が宿るちゅう考えを持つとる。やけん何百、何千という神が存在するんや。ばってん、その中でも別格の神が一人おる。それが俺たち獣人の守り神たる女神デルフィアや」

「女神デルフィア……」

聞きなれない女神の名を、ルーナはそつと繰り返す。

それにうなずき、コットは話を続けた。

「デルフィアは俺たちすべての獣人の母と言われとる女神や。千年以上も昔、女神デルフィアは悪魔から我ら獣人を救ってくれた。ばってん、女神は我らを島へと逃すと同時に力尽きてしまったと。そんな女神は、悪魔に対抗する力ちゅうて女神の宝を託したばい。その宝こそが——これや」

コットは懐に手を入れ、取り出したものを皆に見せる。

金色に輝く円盤型の武器。外形には刃が取りつけられ、それに沿って美しい文様が刻まれていた。円の内側には十字の持ち手が作られており、そこにも細かな文様が描かれている。

「綺麗……」

近くで見せられたそれに、ルーナは思わずつぶやいた。

鋭い刃はキラリと剣呑な光を放っているにもかかわらず、美しい装飾が施された武器は、一流の美術品にも思える。

(日本刀とかと同じかも……。人を傷つける武器だとわかっても、惹きつけられちゃう)

ルーナと同じ気持ちなのか、皆一緒にコットの持つ『神宝』を凝視している。

そんな中、コットは、円盤を一周する文様を撫でながら言った。

「綺麗やる？ これがな、俺たちの一族に伝わるデルフィア神の宝や」

「俺たちの一族？」

コットの言葉に引っかかりを感じたのか、リュシオンが尋ねる。

「ああ、獣人族とひと括りに言っても、さまざまな種族があるとよ。俺の一族は狼の血を引く獣人やけど、鷹や隼といった鳥族や、兎や牛、猫なんかの一族がおるんや。あんたら人族は、『獣人族は皆、島に住んどる』くらいの認識やろうが、本当は島々に各種の獣人が住んどるっちゅうのが正しかばい」

「獣人さんたちにとつては、一族が住む島がそれぞれの国っていう感じ？」

ルーナの疑問に、コットはコクリとうなずいてみせた。

「ちよつと違うとるが、まあそげな感じやな。もうちよい説明すつと……。たとえば俺はハスク族やが、シウやカイはワイヌ族や。ぼつてん、住む地域は違うものと同じ島に住んどると。ルーツはともかく系統は一緒やから同じ島で暮らせとるし、それなりに交流もある。まるつきし関係な一族——たとえば猫族なんか住む他の島とも、ある程度は連絡を取り合つとるんで、嬢ちゃんが言

うような『国』 っちゅうのとはちよつと違うばい」

「なるほど。国という括りにするならば、獣人たちが住む島々すべてを指す——ということかな」

「そうやな」

コットはジーンのとめを軽く肯定した後、さらに口を開いた。

「話がちよこつとずれたがな、要するにこの『神宝』は俺たちの一族に伝わるもんで、デルフィア神がもたらした『神宝』はこれだけじゃないっちゅうことだ」

「それって……」

ルーナのつぶやきに皆が息を呑む中、コットがおもむろに告げた。

「『神宝』と呼ばれるもんは、他にも存在するばい。一族に伝わるもんやない『神宝』なら、自分のものにしてしようと構わんとよ」

「他にも存在する……。しかも、所有者のいないものか」

リュシオンはつぶやくと、考え込むように腕を組んだ。

「『神宝』——つまり、魔族に対抗できる武器が複数存在する。しかも、所有者がいないものもあるかもしれない。それって、わたしたちにとつてはすごい朗報だよね！」

ルーナは隠しきれない興奮のまま、リュシオンに目を向ける。

王都の地下水路で魔族——バルナドと対峙したルーナたち。

しかし、バルナドに一矢報いるどころか、赤子の首を捻るように容易く翻弄されたのは記憶に新しい。

膨大な魔力量と、類稀な魔法の才。それらを有するリュシオンでさえ、まったく言っていないほど手が出せなかった強者。それが魔族だった。

その魔族に傷を負わせて撤退させたのは、ひとえにコットの持つていた武器——『神宝』のおかげだ。

(もしかしたら、魔族に対抗する手段を手に入れることができるかもしれない……!)

その思いは、この場にいた全員が同じだった。

魔族を倒す手段は人が渴望するもの。だがそれを無理に追い求めることによって、不必要な軋轢を生む可能性もある。

そのため、まずは穏便にコットと交渉すべく、ルーナたちは今日彼の家を訪れたのだ。

しかし、今の話で、思いがけない解決策が浮上した。コットが持つ武器ではなく、誰のものでもない『神宝』を手に入れたいのだ。

それぞれ考え中、コットが口を開く。

「あの時、魔族を退けたんはこの『神宝』や。あいつと戦うためにはこれが欲しいうちゅうのは当然やる。まあ、だからといってあっさり『貸したるばい』なんて言うのは無理やけどな」

軽い口調で言うコットに、リュシオンたちは苦笑を浮かべた。

コットの話聞いた今では、『神宝』と呼ばれる武器が彼らにとっていかに大切なものかわかる。それを手放させることは、リュシオンたちが想像するより数倍難しいことだろう。

「理解してくれているなら話は早い。俺たちは魔族と戦うために、奴らをなんとかできる手段が欲

し」

リュシオンが真摯に告げると、続いてカインも口を開く。

「こういう言い方が失礼なのは承知している。だが、事実でもある。魔族の脅威はフォーン大陸に住む人族だけの問題ではない。すべての人間にとつての脅威だ。だから協力することを前向きに検討してほしい」

「勝手だとは思わんばい。この間の魔族……あれは危険や。島に住んどるうちゅうて暢気に構えとれば、いつの間にか自分たちにも危機が迫つとるうちゅうことになる。それに、奴はもう俺が持つ『神宝』の危険性に気づいたと。あんたらが『神宝』を欲するのと同じように、奪いにくるのは必ずやろうな」

コットは淡々と答えると、椅子に凭れ掛かっただけ息を零した。

「この『神宝』に関しては、俺の一存では何も決められんばい。ひとまず一族のもとに帰ってから考えさせてくれんか」

コットの言葉にルーナたちは真剣な顔でうなづく。

話を聞く限り、『神宝』と呼ばれる武器はコットの一族に伝わる宝だ。

今回は獣人族が攫われたため、持ち出しを許されたのだろうが、だからといって所有権がコットにあるわけではない。今すぐに決断できないのもつともなことだった。

「わかった。コットの一族にも魔族の脅威を伝えてくれ。それとは別に——他の『神宝』についての情報があるならば教えてほしい」

リュシオンが頼むと、コットが口を開く。

「あんまり詳しいことは言えんばい、それでもよいか？」

「もちろんだ。言える範囲で構わない」

「いや、言えんちゅうか、知らんちゅうか……」

申し訳なさそうに頭を掻き、コットはぼやく。

そんな彼の態度に、ルーナは驚きを隠さず尋ねた。

「それってどういうこと……？」

「女神デルフィアから与えられた『神宝』なんやが、今のところ獣人族に伝わっちゃるのは、俺たちのもんを加えて三つ。他にもあつたらしいが、長い年月のうちに消えてしまった」

「そんな……じゃあ、一族で所有している『神宝』以外なら、自分のものにしてもいいって言うけど、実際はないってことなの？」

絶句するルーナに代わり、今度はカインが尋ねた。

「現存するのは三つ。もともとはもつと存在していたというのは確かですか？」

「ああ。今日までに、いくつかの一族が滅んでもうたんや。滅んだ一族すべてに『神宝』が伝わったわけやないが……」

「では、所有者が確定していない『神宝』については、すでに形すらなく、探すことも不可能というのですか？」

眉間に皺しわを寄せ、カインはコットを凝視する。だがコットは、すぐにはその問いに答えず、カイ

ンの顔をじっと見返した。

皆が息を呑む中、コットがようやく口を開く。

「とはいえ、この世から『神宝』が消えたわけやなか。行方不明ちゅうた方が正しい。やけん、探せば見つかる可能性もあると」

コットの言葉に、ユアンが嬉々として言った。

「じゃあ、それを見つけることができれば、僕たちは魔族に対抗できる武器を手に入れられるってわけだね」

「……ばってん、そんな簡単な話でもなか」

「えっ……？」

コットの低い声に、皆が戸惑いの視線を向ける。

彼は小さく息を吐くと、申し訳なさそうに話し始めた。

「失われたちゅう表現もあながち間違つたらん。なんせそれらの『神宝』を見た者はおらんどだけんな。俺たち獣人も、まるつきし心当たりがなか」

「それは……」

何と言つて良いのか、ジーンはそれだけつぶやくと表情を硬くする。

(希望が見えた途端、奈落に突き落とされたみたいだね……)

しょんぼりとしたルーナは、ちらりとリュシオンを見た。彼はそこまで落ち込んでいないものの、やはり険しい顔をしている。

だが、ルーナの視線を感じた途端、リュシオンは不敵に笑った。

「それでも、打てる手は打つべきだろう」

きっぱりと言い放たれ、皆がハッとしたように表情を変える。彼が言う通り、できることがあるならば、絶望する前にやってみることだ。

「コット。心当たりはないと言ったが、手がかりもまったくないのか？ たとえばありかを知っているような人物とか、滅びた一族にまつわる場所とか」

リュシオンに尋ねられ、コットは腕を組み直して考え込む。

しばらくそうして考えていた後、彼は唐突に両手を打ち鳴らした。

「そうだ！ あの方なら知つとるかもしれない」

「あの方……？」

ルーナが首を傾げるのを余所に、コットは何度もうなずいている。

自分だけ納得している様子の彼に、焦れたルーナが問いかけた。

「コットさん、あの方って？ 心当たりがあるんですか？」

ルーナに尋ねられ、コットは我に返って言った。

「一つだけやけん、な」

「ぜひ教えてくれ！」

リュシオンが強く言うと、コットは不安げな様子のまま話し出した。

「あの方うちゅうのは、俺たち獣人の間では『とこしえの賢者』と呼ばれとる方のことや」

（『とこしえの賢者』……なんだかすごくそんな人っぽい）

心の中で感想を漏らし、ルーナは改めてコットの話に耳を傾ける。

「賢者様はな、何十年かにいつぺん、ふらりと島々を訪れては、俺たちの困りごとを解決してくれるばい。あの方に解決できへん問題はなか。その知識の豊富さと、はじまりの長の頃から変わらず存在しとるつちゅうことから『とこしえの賢者』と呼ばれとると」

「はじまりの長というのは、初代の長という意味か？」

リュシオンが口を挟むと、コットは大きくうなずいた。

「そうや。俺たちの一族は、女神デルフィアを護つとった一人が興したもんや。『とこしえの賢者』は、そんな頃から存在すると聞いたるばい」

「えっ、じゃあ『とこしえの賢者』さんは、少なくとも千年単位で生きてるってこと？」

ルーナが思わず驚きの声をあげる。

彼女の前世である、高崎千幸たかざきちゆきが生きていた地球。そこから見れば、サンクトロイメという世界は剣と魔法の国——ファンタジー世界だ。

魔族や魔物、獣人族といった、地球にはいない種族が多く存在する。

しかし、数千年を生きるような長命種は、サンクトロイメのどこを探してもいない。

魔力量の多い者は老いが遅かったり長命であったりするが、それでも寿命が二百年を超える者はいなかった。

コットの話す『とこしえの賢者』は、千年以上生きていることになるが、そう考えると簡単には

信じられない。

訝しげなルーナたちに対し、コットは苦笑すると、仕方ないとばかりに頭を掻いた。

「疑わしいっちゅう嬢ちゃんたちの気持ちはわかるばい。実際、俺も実物は見たことなか。ばつてん、俺たち獣人は、幼い頃から『とこしえの賢者』を敬うように育てられるとよ。もちろん疑うなんてもつての外や。やけん、自然と受け入れとるんやが……まあ、大人になった今やから言えるが、おそろく『とこしえの賢者』っちゅうのは、代替わりしとるけど同じように名乗っちよるだけやろな」

「なるほど、それなら納得できますね」

カインがうなずくと、コットはさらに続けた。

「『とこしえの賢者』が一人ではないにしろ、知識は受け継がれとるんや。やけんこそ、俺たちは賢者様をずっと敬ってこれたんや」

「そうだよ。単なるうさんくさい自称賢者さんだつたら、すぐにバレちゃうよ」

ルーナが言うと、コットはニヤリと笑ってみせる。

「ああ、そういうことや。まあ、賢者様に『神宝』の行方ば訊くのがよかばい……賢者様自体、会うんは骨ば折れるとよ」

「簡単には会えないんですか？」

コットの言い草に、カインは不思議そうに尋ねた。

「コット、私たちに『とこしえの賢者』の居場所を教えてください」

続けてジーンが頼み込むと、コットは「うーん」と唸つた後、申し訳なきそうに言った。

「教えたいのはやまやまやけん……俺も正確な居場所はわからんと」

「それはどういことだ？」

リュシオンの問いに、コットは重い口を開く。

「さつきも説明したばつてん、賢者様は何年かに一度、ふらりと島へやってくるばい。決してこちらから呼び寄せとるわけじゃなかと。あの方が現れるんは、決まって何か困りごとが起こった時だけばい」

「じゃあ、『とこしえの賢者』さんの居場所も、一から探さないといけないってこと？」

ルーナは途方に暮れてつぶやく。

所在不明の『神宝』については、手がかりがない。あえて当たりをつけるならば、『獣人たちが住む島のどこか』くらいだろう。海に浮かぶ島々すべてから探そうとすれば、途方もない時間と労力がかかる。

だが、『とこしえの賢者』を探すのも、同じくらい困難なようだ。

(時間があれば、まだ希望が持てたんだろうけど……)

すでに魔族は至るところに魔の手を伸ばしている。

ルーナたちには、魔族に対して悠長に構えている時間などなかった。

またしても希望を打ち砕かれ、皆の間に重苦しい静寂が漂う。そんな中、コットが困った顔をして口を開いた。

「役に立てなくて悪かな……」

「いや、おまえのせいじゃない」

リュシオンはすぐさま否定すると、気持ち切り替えるように深い息を吐き、明るい表情で言った。

「ひとまず、有益な話が聞けただけでもありがたい。『どこしえの賢者』については、こちらでも調べてみよう。何か手がかりが見つかるかもしれない」

「そうですね。それに今は、コット以外の獣人たちもいます。何か目新しい情報があるかもしれませんし」

カインが続けて言うと、皆はその通りだとばかりに首肯したのだった。

+

「——あの時の話が何か？」

回想を終えたルーナは、目の前のコットを不思議そうに見た。

結局、『どこしえの賢者』については、他の獣人たちに尋ねてもコットと似たり寄ったりの答えしか返ってこなかった。

リュシオンたちは引き続き『どこしえの賢者』についての情報を集めているが、未だ難航している。

「いやな、ちょこつと思いい出したことがあるとよ」

「思いい出したこと？」

首を傾げるルーナに、コットはコクリとうなずいてみせる。

「賢者様についてやけど……俺がガキの頃、先々代の長老——俺の曾祖父にあたる人が言いよつたたい。賢者様が住まうんは、大きな大陸のずっと北の外れやと。氷山に囲まれた氷の城に住んどるつちゆうてな」

「それってもしかして……!」

期待に胸を膨らませるルーナだが、コットは自信なさげにしている。

「本当かもしれない、そうじゃなかかもしれない。なんせガキの頃に一度だけ聞いた話ばい。爺さんが、子供におもしろか話をつてことで作った与太話の可能性もあつけん。迷ったんばつてん、言わんのもどうかと思つてな」

彼自身ずっと忘れていたくらいなので、おそらく雑談のような話だったのだろう。推測通り曾祖父が創作し、幼い曾孫に話して聞かせたのかもしれない。だからこそコットも、ずっと話すべきか躊躇っていたに違いない。

ルーナは、そんな彼に満面の笑みを向けた。

「コットさん、話してくれてありがとう。わたし、その話について調べてみる」

「いや、本当に無駄足ばなると思うぞ」

「たとえ無駄足でも、無駄足だったということがわかるからいいよ。そしたら、ひとつ調べること

が減るし。充分やる価値はあるでしょう？」

迷いのない瞳で、はっきりと言いつけるルーナに、コットは呆気にとられる。だが次の瞬間、プツと噴き出すと、彼女の頭に手を置いた。

「嬢ちゃん、頑張れよ。そっちの調査は任せるわ。俺は俺の仕事をするけん」

「コットさん？」

決意を込めた言葉に、ルーナは訳がわからず首を傾げる。

そんな彼女に笑いかけると、コットは宣言した。

「最悪、この『神宝』だけでも、なんとかかできるようにするばい」

「コットさん、でもそれって……！」

「魔族の脅威は他人事じゃなかと。ぼつてん、どうしても『神宝』がいるのなら、役立ててもらおう方がよか。やけん、一族を説得してくるばい」

コットは力強くトンツと自分の胸を叩くと、ニツと口角を上げてみせる。

自分たちの一族に伝わる『神宝』。

文字通りの宝を預けても良いという言葉に、ルーナは彼が信頼してくれていることを感じ取った。

彼女は、ふわりと表情を緩めると、コットに向けて頭を下げる。

「コットさん、ありがとう」

「嬢ちゃんたちが俺たちにしてくれたこと、それが巡り巡るだけや。こつちこそありがとうな」

(情けは人の為ならず……か)

ルーナは日本のことわざを思い浮かべ、ひっそりと笑みを零す。

すると、それまで黙ってやり取りを聞いていたフレイルが、彼女の肩を叩いた。

「そろそろ、時間じゃないか？」

「ああ。じゃあ、行くわ」

コットは軽く手を上げると、さっとルーナたちに背を向ける。

そんな彼の背中へ、ルーナは慌てて声をかけた。

「コットさん、気をつけて！ 元気でね」

「無事の帰還を願ってる」

ルーナとフレイルの言葉に、コットは右手を天に突き上げて応える。そしてそのまま、振り返ることなく棧橋を歩いて行った。

やがて彼の姿が船に消えると、二人は無言のまま出航の準備を見守る。

しばらくすると、看板にいくつもの人影が現れた。旅立つ獣人たちだった。

「……皆」

ルーナの口から、小さなつぶやきが漏れる。

それが聞こえるはずはないのだが、まるで応えるようにたくさんの獣人が同時に手を振った。

「ルーナア！ ありがとうとおお！」

「ありがとう、またねえ！」

聞こえてきた可愛らしい声は、シウとカイなのだろう。

ルーナは皆に負けないように大きく手を振ると、船に向けて叫んだ。

「皆、元気で！」

錨いかりが持ち上げられ、船が動きだす。

ルーナとフレイルの二人は、遠ざかる船影をただひたすら見送っていた。

第二章 歪んだ愛情の行方

その日、王宮の会議室には五人の人物が集まっていた。

部屋の中央に配置された長方形の紫檀したんのテーブル。

その上座の席にゆるりと腰をかけるのは、この国——クレセニア王国の君主であるバートランド・カール・クレセニアだ。

彼の斜向はすむかいには、リヒトルーチェ公爵、アイヴァン・クレイ・リヒトルーチェ。

そして、反対側に王太子であるリュシオンと、隣国エアデルトの第二王子カインが座っている。

「ルーナは、カールへ向かったか……」

唐突な国王のつぶやきに、アイヴァンが恭うやまつしくうなずく。

「特別に〈転移門〉の使用も許可されています。獣人たちを見送った後、すぐに帰還することでしょう」

「悪かったな、アイヴァン。本来ならルーナがやるべきことではなかったんだが……」

申し訳なさそうに言う国王に、アイヴァンは無表情むていじょうに応えた。

「本当です。何故うちの可愛い娘が……しかもまだ未成年なのに、国の尻拭いのような仕事をさせられるとは」

「うっ……おい、それは否定できないが、ものには言い様というものがあるだろう」

「言い様もなにも、れっきとした事実です」

「はあ……」

大きなため息を吐く国王は、分が悪いと思ったのかアイヴァンから目を逸らす。そして、誤魔化すように息子へ声をかけた。

「リュシオン、手配の方に不備はないな？」

「もちろん。公爵も言ったように〈転移門〉を使用し、予定通りにカール港へ着いたと聞く。そろそろ船が出航した頃か……今回航行を頼んだのは、幾度か秘密裏の仕事も頼んだことがある、信頼できる船長だ。きちんと島まで獣人たちを送ってくれるだろう。ルーナの方は、フレイルがついているし、遅れて向かったユアンがカールで合流する手筈になっている。問題なく王都へ帰還するはずだ。一応、船が出港した後に連絡をするようにも言っているから、間もなく連絡が来るんじゃないか？」

リュシオンが一息に言い終えると、国王は満足げにうなずく。

「なるほど、ユアンが迎えに行ったか。遅れて向かったのは、先んじて休暇を取ったフレイルと結びつけないためか」

「ああ。今は新人の一魔法士とはいえ、ユアンの生家はリヒトルーチェ公爵家。当然、その動向を窺っている者は多い。迂闊な行動をして、王妃の件をよからぬ輩に悟らせたくないからな。獣人たちを送った後ならば、友人であるフレイルや妹のルーナと合流した場面を見られても問題は

ない」

「今のところ、フレイルに注目する者はいないですからね」

カインが付け足すように言うと、リュシオンは苦笑いを浮かべた。

ユアン共々、レングランド学院の秀英として、鳴り物入りで魔法師団に入団したフレイル。

だが彼は、自らが目立つことがないように控えめに行動していたことに加え、ユアンという絶好の隠れ蓑を利用したことで、入団後はそこそこ優秀な新人りと認識される程度にとどまっていた。

なにしろユアンは、公爵家の二男という身分。さらに、片方の取得ですら難しい上級資格を、白黒魔法の両方で得ているのだ。

けれど、ユアンには劣るものの、フレイルの魔法の才も目を瞞るものがある。さらには、一部の者のみが知っている事実だが、彼は精霊使いでもあった。

精霊使いとは、精霊と心を通わせ、使役することができる存在のこと。

魔法よりも強い力を振るうことのできる精霊使いは、昔から権力者に力を求められつつも非人道的な扱いを受けてきた。彼らの保護を掲げているクレセニアであっても、その力を利用しようと狙う者はいる。

そのため彼は、自分が精霊使いであることを周囲にひた隠しにしているのだ。

「フレイルがついているなら、ルーナのことは心配ないな」

国王が改めて言うと、すかさずアイヴァンの不機嫌そうな声がかかる。

「我が愛娘のことは、あなたに心配してもらわずとも結構！」

「おいおい、心配するぐらい良いだろう」

「本意ながら、あなたがルーナの後見であるのは確か。とはいえ、彼女は私の娘ですからね？
まるで自分の娘であるかのような態度をとるのはやめて下さい」

じとりとした目で見てくるアイヴァンに、国王はうんざりとした表情で肩を竦めた。

「わかった、わかった。ひとまず獣人たちが大陸を去ったならば、そちらのこともひと段落したという事。——それよりもこちらのことだ」

「あらかたの準備は整ったのでは？」

国王の言葉で察したのか、ジーンが尋ねる。

すると国王は、苦い顔で口を開いた。

「茶番の舞台は整った。あとは台本通りに進行するだけだ。だがな、舞台には必ず予想外の出来事が起こるものだ」

「予想外、ですか……」

ジーンが繰り返すと、国王に代わってアイヴァンが応える。

「いくつか懸念はある。もちろんその対策はとるが、とりあえずは台本通りに動くしかないだろうね」

「まずは、王妃の死を公示することからですね？」

「そうなるね」

カインの指摘に、アイヴァンはうなずいた。

王妃の死。

クレセニア国王妃キーラは、数日前に毒物によって命を落としている。

毒を運んだのは、王妃の近くに侍っていた女官。その後、彼女が魔物化していることから、王妃の死に魔族の関与があったことは間違いないだろう。

それらの真相究明の糸口となるはずだったが、女官を使って毒物を手に入れた男——ロバートというグレイヴル家の従僕だった。

グレイヴル家は、クレセニア王国にて伯爵位を賜る名家。その長男であるホレスは、リュシオンの側近の一人でもある。

ロバートに陥れられたホレスは、王妃殺害の容疑者となり、リュシオンたちが無実を証明するまで長く王宮に留め置かれることになった。

幸いにも、ロバートという男への疑惑が上がったため、ホレスの容疑は晴れたわけだが、肝心の真犯人は逃亡してしまっていた。

その後、王妃については、毒殺されたことを公表できないことから、彼女は病に伏しているとだけ国民に伝えられた。

しかし、死因は明らかにできないとしても、いつまでもその死を隠すことはできない。いかに国内の混乱を最小限で公示するべきか——それが国王たちの課題だった。

さまざまな根回しの結果、ようやく国内外に王妃の死を知らしめることが出来るようになったのだ。